



観光まちづくりレポート

真田と世界遺産でまちなか活性化をめざす

～和歌山県伊都郡九度山町～

和歌山県北部、目の前を紀ノ川がゆったりと流れ高野山に続く高原の麓に広がる九度山町は、空海（弘法大師）による高野山開創とともに栄え、戦国期には、関ヶ原の合戦で敗れた真田昌幸・信繁（幸村）父子が閑居し、再起を図ったところである。

しかし、住民の都会への流出と少子高齢化が進む中、徐々に活気が失われつつあることから、同町では、行政と住民の協働により「九度山町まちなか活性化協議会」を立ち上げ、「世界遺産」、そして「真田」をキーワードに、町への誇りとおもてなしの心でまちづくりに取り組む。

高野山と真田父子閑居のまち九度山

和歌山県伊都郡九度山町は、戦国時代の武将、真田昌幸とその次男信繁（幸村として有名）が関ヶ原の戦いに敗れた後、14年の間隠棲した地として有名である。

父の昌幸はこの地で没し、幸村は、大坂の役で豊臣氏滅亡と同時にこの世を去ったが、その際の幸村の戦いぶりは、一時は徳川家康の本陣を脅かしたほどで、島津家の薩藩旧記で「真田日本一の兵」と賞された。そして、その後も幸村の名声は衰えず、「真田十勇士」の名と共に、江戸時代以降も歌舞伎や講談で称えられ、また、小説の題材ともなり今日まで語り継がれている。

波乱に富んだ真田幸村の生涯であるが、ここでの暮らしは穏やかな日々であったといわれており、茶道具の桐箱の紐として使用される「真田紐」は、この時期に真田昌幸・幸村父子とその家族が作製し、堺の商人を通じて販売したとされ、伸びにくく丈夫な紐として今も使用される。

また、九度山町は、高野山の麓に位置する要所で、高野山開創の際には、庶務を司る政所・宿所として「慈尊院」が建立され、空海（弘法大師）の母公が晩年の居所ともしたことから、女人禁制の高野山に対して「女人高野」とも称されてきた。この「慈尊院」から高野山にかけての表参道として、約20kmにわたり「高野山町石道」が開かれ、世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」において、同町では「女人高野慈尊院」「町石道」、その他「丹生官省符神社」が登録され、高野山開創以来の信仰に縁の深い町でもある。

真田を核として町内が一体化…真田祭

真田氏の旗印である六文銭の意匠が案内板など町内各地にみられる九度山では、毎年、5月4日と5日に「真田祭」が盛大に催される。

この祭りは、真田昌幸・幸村父子をしのぶ祭りであり、昭和11年の小学校児童による武者行列に始まり、当時は幸村が大坂夏の陣で壮絶な最期を上げた5月7日に行われていた。

第二次世界大戦により一時は中断されたが、町住民の心のより所として戦後間もなく復興し、昭和31年からは、こどもの日の5日に催されている。

当初は武者行列だけであったが、平成4年からは「ふれあい広場」を主会場に模擬店やステージも設けられ、開催も3日間（現在は4日、5日の2日間）と規模を拡大し、町民のコミュニケーションの場として、また、町外からの大勢の人々を迎える場として発展している。

祭りでは、真田昌幸・幸村・大助の三代に扮した武者を先頭に、いわゆる「真田十勇士」など、真田の赤備えと呼ばれる赤い甲冑に身を包んだ武者が続く勇壮なもので、甲冑は、現存する真田勢ゆかりの甲冑を模写したリアルなものである。

子供たちによる子供武者の行列や少女薙刀隊、また、同じ和歌山県内で、戦国期に鉄砲隊で勇名をはせた「雑賀衆（孫市の会）」の行列なども加わり、「ふれあい広場」から九度山の街中を通り、真田昌幸父子の屋敷跡といわれる善名称院（真田庵）まで練り歩く。

ちょうどゴールデンウィーク中でもあり、4日、5日には連日約1万人の来訪者が有るといふ。



1万人の人出で賑わう「ふれあい広場」での出陣式の後、真田昌幸公を筆頭に武者行列がスタート。



平成2年に国の「ふるさと創生資金」などを活用し本格的に甲冑が揃えられ、見ごたえのある行列。



少年武者や町外から参加の「雑賀衆」も続く。



真田父子の屋敷跡といわれる真言宗善名称院（真田庵）。その境内には、真田昌幸の墓所と、隣接して真田地主大権現の祠が建ち、季節折々の花が咲き乱れる。

もてなしの心で交流活発化…町家の人形めぐり

平成21年からは、町住民のグループ「九度山町住民クラブ（阪井賢三会長）」が中心となり、もう一つの名物イベントである「町家の人形めぐり」がスタートした。

4月1日～5月5日までの期間、同町九度山の街中の民家、商店、空き店舗、施設などに、その家その家の謂れのある五月人形、雛人形、つるし雛、創作人形、自作甲冑他自慢のお宝人形等を玄関や店頭展览展示し、自由に見学してもらうとともに、謂れなどについてゆっくりと住民から話をすることで、来訪者に楽しんでもらい、心からのおもてなしをしようというものである。

近年、九度山町においても、全国の多くの地方都市同様に少子高齢化、過疎化が進み、まちの活気が徐々に失われつつある。

その中、まちの活性化を考える時、住民自身が自分たちの努力で気持ちに元気を持たなければならないが、阪井会長らは、活性化の先ず第一歩として、住民同士の活発な交流と対話が大切と考え、住民の共同作業を通して「まちを交流の舞台」にすることができて、しかも九度山に相応しいアイデアはないものかと模索していた。

そして、その格好の事例として、奈良県高取町

の「雛めぐり」の情報を手に入れ、さっそく高取に調査訪問したところ、九度山には5月5日に毎年恒例の真田祭りがあり、しかもこの日は端午の節句で五月人形が飾られることから、歴史のまち九度山に相応しく、交流と活性化も期待できるイベントとして応用することとした。

そして早速、町内の各団体・グループに参加と協力を呼びかけたが、始めは成功に半信半疑の声も多く、また、住民内にも「飾って観てもらえるような人形は無い」などと消極姿勢が目立った。

しかし、それでも、まちづくりの第一歩としてなんとかスタートさせたいとの思いから、五月人形に限らず、雛人形でも、創作人形でも、どのような人形でもいいからと参加を呼び掛け、賛同者10数軒で、とりあえず所蔵の人形を玄関や店先に飾った。

そして、それを見た人々から、「こういう人形なら家にも有る」「良い交流のきっかけとなった」などの声も出始め、いよいよイベントが正式に開始される4月1日には、50軒ほどが展示に参加、最終的には62軒の家々の玄関・店先が人形で飾られた。



特設会場の五月人形と雛人形は圧巻。九度山町の歴史解説も展示される。解説の人もいて交流が深まる。



家々で思い出・謂れのある人形を展示。

中には100年前の雛人形も。



行政・住民協働のまちづくりを目指して

■まちづくり活動の立ち上げ

九度山町は、高野山や真田氏ゆかりの史跡を有し、観光地の可能性を秘めるにも関わらず、受け入れ態勢に不十分な面もあり、経済的な効果に結びつけ、まちの活性化に繋げる活動が急務であった。

そこで、平成20年、和歌山県の計画事業として高野山から熊野古道、熊野三山地域の広域活性化が図られた際、同町ではその一環として、「九度山町まちなか活性化協議会」が立ち上げられた。

同協議会は、町長を会長に、行政関係者、商工会等の事業者、また、町住民の協働により町の活性化を目指すものであり、その政策を具体的に実行するため「九度山町まちなか魅力アップ実行委員会」が組織され、「もてなし部会」「まちなみ部会」「商品売り出し部会」が活動を開始した。

行政の手を借り、まちなかの「真田庵」「真田の道」また、同町出身の大正・昭和初期の政治家である「松山常次郎記念館」等の施設の充実、駐車場等のインフラ整備も徐々に進み、ソフト面でも、真田氏ゆかりの信州上田市の協力でそば打ち職人の養成に取り組み、そばの名物化に取り組んでいる。また、九度山町内を案内する「まちなか

語り部」を養成し、真田・世界遺産を中心に観光スポットを案内している。

■住民を主体とする「九度山町住民クラブ」の誕生

また、同協議会活動をきっかけに、町住民内においては、阪井賢三氏がリーダーとなり「九度山町住民クラブ」を立ち上げ、まちなかを観光客や住民同士の交流の舞台にしようと「町家の人形めぐり」をスタートさせた。

住民が行動を起こすことで、行政と住民が理解し合い互いの協働により、その延長にまちの復興が見えてくるとするものである。

同クラブは、「地域内外の人々の交流の場はできた。しかし、経済的な効果の創出に結びつかなければ、地域活性化はできない」として、さらに三つの方向性を志向する。

①地域コミュニティの再生

人に集まり、毎日でも歩いてもらいたい。そうすれば地元の人が町で買い物をする機会も増え、観光客にとっても訪れて楽しい町となるだろう。

②住民が誇りを持つ

お客を迎えると同時に、次代を担う子供たちに町の歴史・文化を伝え、郷土愛を持ってほしい。

そのために、住民の間で真田をテーマに何か物語ができないかと考え、「語り部の会」が中心となり、真田父子を描いた紙芝居「真田物語」を制作し、子供たちに伝えている。

③外からのお客様とのご縁を深める

町の中からも遠方からも、自分のお客様をつかむ、人と人とのふれあいの活発化。地域のホスピタリティ、「おもてなしを地域で」ということがまちおこしの理念である。

■手作り甲冑教室

さらに同クラブは、地域コミュニティのさらなる活性化と、真田をテーマとした地域への誇りとホスピタリティ向上を目指して住民や様々なグループに協働を呼び掛け、「町家の人形めぐり」の運営においても、多くのボランティアの人々に支えられたという。

また、行政の支援も得て「手作り甲冑教室」を開催し、真田祭りには、教室のメンバーと共に手作りの甲冑で参加し祭りを盛り上げている。



手作り甲冑の展示と説明する阪井氏（下）。甲冑を着て真田庵参詣（右）。



土産用工芸品として人気の「もち花」作りには、町内外から参加者が集まった。



(写真提供：九度山町住民クラブ)

真田と世界遺産紀伊山地の霊場と参詣道の町として

九度山町においては、行政・住民・事業者の協働によるまちの活性化は、「九度山町まちなか活性化協議会」事業により本格的に始まったといえる。

その中で、行政がやるべきこと、住民・事業者がやるべきこと、行政・住民・事業者が協働でやるべきことが見え始めてきている。

「真田」と「世界遺産」にちなんだ、数々の自然・歴史・文化の地域資源を持ち、それをテーマとした郷土への誇りとおもてなしの心の醸成により、世界遺産登録時に発足した「高野山町石道語り部」の充実や、街中を案内する「まちなか語り部」の養成を始め、紙芝居作りや、甲冑作り、さらには「紀州真田そば」の開発などで着々と根を下ろしつつある。

地方分権が叫ばれる一方で、都市と地方の格差拡大が進む中、人口の減少、雇用の減少に直面する地域経営において、住民・来訪者に限らず「顧客満足」を得るためには、それと一対をなす「おもてなしの心」が不可欠になりつつある。(山城 満)